

中国のツングース諸語

著者	津曲 敏郎
雑誌名	国立民族学博物館調査報告
巻	39
ページ	213-222
発行年	2003-06-30
URL	http://doi.org/10.15021/00001917

中国のツングース諸語

津曲 敏郎

- | | |
|-------------------|--------------|
| 1 はじめに | 4 ヘジェン語テキスト例 |
| 2 民族／言語分類, 人口, 分布 | 5 主要研究文献 |
| 3 中国領ツングース諸語の共通特徴 | |

1 はじめに

ツングース諸語は10ほどの同系諸言語からなり、おもに中国東北部および新疆とロシアの東部シベリア・極東地方に分布している。話者人口は、言語により数十人から数万人規模までであるが、ツングース諸語全体を合わせても7万人以下と見られる。ここでは中国のツングース諸語について、その現状と言語特徴を概観し、具体例として民話テキストの一例を紹介したい。あわせてこれまでの研究状況とその問題点を指摘する。

2 民族／言語分類, 人口, 分布

中国では公式に5つのツングース系少数民族を認め、それをそのまま言語分類にもあてはめている。しかしながら今日一般に認められるツングース諸語の言語学的分類とは一致しない点がある。表1に中国での民族／言語分類と方言区分、それに対する一般的言語分類との関係を示す。

表1 中国のツングース系諸族とその言語の帰属

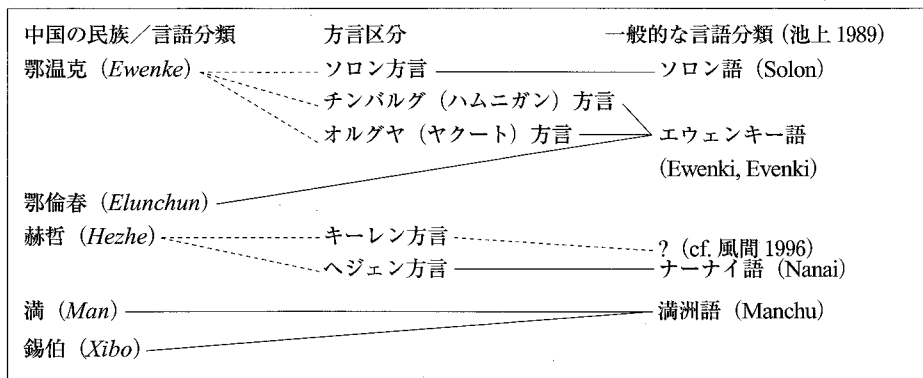


表2 中国のツングース諸族人口の推移と民族語話者数

	1982年	1990年	民族語話者数 (Hu et al.1988)
鄂温克	19,343	26,315	17,000
鄂倫春	4,132	6,965	2,240
赫 哲	1,476	4,245	40
滿	4,299,159	9,821,180	70
錫 伯	83,629	172,847	26,760

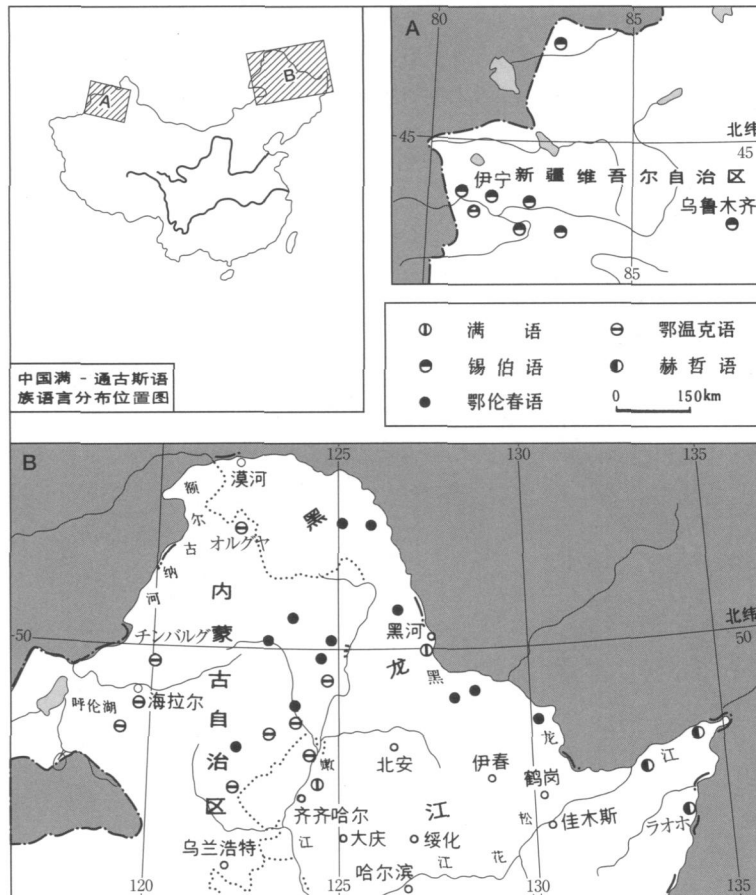
表1に見られるように、中国でいう鄂温克（エウエンク）語のうち8割方を占める「ソロン方言」は、言語分類上ソロン語という独自の言語であるのに対し、他の少数派の2方言は、ロシア・シベリア東部に広域分布するエウエンキー語の方言であると認められる。なお、チンバルグ（ハムニガン）方言のグループはまたツングース・エウエンクとも呼ばれる。オルグヤ方言のグループをヤクートとも呼ぶのは、単にチュルク系のヤクート（サハ）の居住地域付近から移って来たと見られているためであり、言語的にツングース系であることは間違いない。鄂倫春（オロチョン）語も、上述のエウエンク語2方言とともに、エウエンキー語の方言として位置付けられる。赫哲（ヘジェ、ヘジェン）語は通例、ナーナイ語の方言と見られているが、風間（1996）によると、その主要方言であるキーレン方言は、音韻対応上、むしろウデヘ語やオロチ語のグループ（池上1989の分類の第二群）に近いとされる。いっぽう、満族（＝満洲族）と区別された錫伯（シボ、シベ）族の言語は、ともに同じ満洲語の方言と見られる。なお中国では単に「満語」というと、清朝時代の文語を指すことが多く、生きた口語を指すときは「現代満語」ということが多い。

これらのツングース系諸族の人口について、1982年と90年の統計の数字をあげておく（表2参照）。中国の統計には、民族言語の話者人口は特に現われないので、言語学者による推定数を付しておく（おそらく第二言語話者を含む数字）。中国全体で少数民族人口は一般に増加を示しているが、これには漢族も含めた全体的な人口増加傾向や民族意識の高まりのほか、少数民族に対する優遇措置から積極的に少数民族を名乗るケースが増えていることも関係している。それに対して民族言語の話者数は、比較できる確実な数字はないが、減少していることは疑いない。特にヘジェン語と満語の話者数はこの時点ですでに僅少であり、きわめて危機度が高いと言わなければならない。ヘジェン語について、筆者は1992年にウスリー江沿いのヘジェンの村を訪れる機会があったが、高齢の話者を残すのみであった。その話者の多くもその後亡くなられたと聞いている。満語については、学校での教育も試みられているようだが、文語の伝統があるばかりに、読み書きに主眼がおかれ、口語の維持・普及には必ずしも直結していないのが現状である。それに対してシベ語は、比較的多数の話者によって維持されており、30代の流暢な話し手も珍しくないようである。ただし特に都市部では、家庭内でも次第に使われなくなる傾向は否めないという。なおシベ語も満洲字をほぼそのまま継承した文語をもつが、そ

の実態は清朝時代の満洲語文語と大差のないものであり、ここでも口語との乖離が見られる。

これら中国のツングース系諸族の分布については地図を参照されたい。おおむね東北部の黒龍江とその支流域に集中しているが、シベ語だけは新疆ウイグル自治区（特にウルムチ市とイリ・カザフ自治県）に飛び地のように分布している。これは清朝の乾隆年間（18世紀）に東北地方から辺境防備のために派遣された駐留軍の子孫である。エウエンク語方言の分布について付言すると、ハイラル市の北にあるのが、いわゆるツングース・エウエンク（朝克 1995: 4によれば人口2,347人、うち話者2,060人：ソロン語話者を含む数字か？）、内蒙古自治区最北部にあるのがオルグヤ・エウエンク（同上では人口502人、うち話者324人）である。これら両方言の調査・研究も急務であるが、一般に中国では主要方言（この場合はソロン・エウエンク、すなわちソロン語）の研究でこと足れりとして、弱小ないし非標準的な方言（この場合、実は別の言語）は省みられること

地図 中国のツングース諸語分布図（胡 1988: 275に加筆）



が少ない。これはある意味で自然な選択でもあるが、危機度の高い言語（方言）こそ記述を急ぐべきであるという考え方が十分に浸透していないとすれば、残念なことである。したがってこれら両方言についても、今のところおもに（筆者を含む）外国人研究者の記述がわずかにあるにすぎない。

ちなみに筆者はオルグヤで、30～40代の比較的若い話者と接する機会があった。上述のとおり集団の規模は小さいが、都会から離れた非常に辺鄙な所でトナカイ飼育を行いながら周囲から比較的自立した生活をしている人たちである。おそらくそういう条件のせいで、恐れていたほどには、言語の保存状態は悪くないという印象を受けた。もちろん子供が継承していない以上、遠からず消滅に向かうことは避けがたく、緊急の調査が必要であることに変わりない。

3 中国領ツングース諸語の共通特徴

さて、中国の記述などをもとに中国領のツングース語を見ると、ロシア側のツングース語といろいろな点で違っていることに気づく。それは、一つには記述の違いということももちろんあるだろうが、言語構造自体の違いに帰せられる点がかなりあるように思われる。このことについてはすでにいくつかのところで発表したので（津曲 1996, Tsumagari 1997）、ここで詳しく繰り返すことはしないが、目立った文法面での特徴だけを列挙してみたい。

①名詞・代名詞の属格（田村 1992, 津曲 1992）

まず中国のツングース語では、「～の」にあたる属格が名詞・代名詞ともに発達している。つまり、ロシアのツングース語には一般に名詞に属格というものがなくて（人称代名詞には属格を有する言語もあるが）、所有などの関係を表わすときには、ただ名詞を並べて後の所有物名詞の最後にいわゆる人称語尾「そのの」を付ける。たとえば「鳥の巣」なら、「鳥 巣-そのの」のように表わすのが、ロシアのツングース語では一般的である。それに対して、中国領では代名詞・名詞ともむしろ日本語式に、「の」にあたる属格を使うことが多い。そして所有物名詞に付される人称語尾は、あまり使われないか、随意的というケースが多い。

②譲渡可能接尾辞の欠如（津曲 1992）

これとおそらく関連することだが、中国のツングース諸語では「譲渡可能接尾辞」が欠如している。すなわち所有者と所有されるものとの関係に応じて、自分に近い側のもの（たとえば身体の一部、親族、家畜、日用品など）とそうでないものを範疇分けして、遠い側のものに義務的に接辞を付けて区別するということが、ロシア側のツングース語では知られている。中国の記述を見る限り、そういう接尾辞にあたるものは見当た

らないし、筆者自身の調査した範囲内でもそのような区別や接辞は確認できない。

③ 指定格の欠如

名詞の格変化で指定格というものがロシア領のツングース語のいくつかにはあるが、中国領のツングース語にはどの言語にもない。指定格というのは、風間 (1999) によれば、何か新しく出現する場合の自動詞主語、あるいはある動作の結果新しく生じた他動詞目的語などを表わす格である、というとらえ方がなされている。中国領のツングース語の記述を見ても、そういう関係を表わすための特別な格というものはない。

④ 形容詞の重複強調形 (津曲 1993)

中国のほとんどのツングース語では、形容詞の第一音節の最初の CV に b などの子音を付けて重複することで、強調形を作る手法がある：ソロン nob nogo「真緑の」、オロチョン bag bagdarin「真っ白な」、ヘジェン tab targun「まるまる太った」、シベ fak farxun「真っ暗な」。ちなみにチュルク系やモンゴル系の言語に全く同じようなやり方がある、恐らく直接にはモンゴル系の言語から入った語法だろうと見られる。しかし、これはロシア領のツングース語には確認できない。

⑤ 一致の欠如

統語論的な問題として、形容詞と名詞、一般に修飾語と被修飾名詞との間に、主に格に関する一致がいろいろな形でロシア領のツングース語には見られる。例えば「大きなトナカイを」というようなときに、「大きい」という形容詞も対格を取って、「大きい(の)を・トナカイを」のように表わす言い方だが、そういうことが中国のツングース語では見られない。風間 (1994) によると、一口にツングース語の一致と言っても、エウエン語・エウエンキー語のタイプと、それ以外のアムール下流域などのツングース語での一致では、タイプが異なるとされるが、いずれにしても中国領ではこの種の現象はまったく見られないようである。

このように文法面に限って見ても、中国のツングース語はロシア領のそれと比べて、いろいろな点でかなり違っている。国境が確定したのはさほど古いことではないから、比較的新しい変化によって、言語の構造が違ってきているというようなことが一応言えるかもしれない。しかし歴史的に考えると、中国のツングース語に対してはモンゴル語の影響、そのモンゴル語の影響を受けた満洲語の影響、それからさらにそれを包みこむような形での中国語の影響といったような、比較的長期に渡る重層的な影響関係を考えなければならないだろう。

4 ヘジェン語テキスト例

ここで筆者が1992年8月、黒龍江省饒河(ラオホ)で採録したヘジェン語の昔話

(teclungu) を紹介したい。表記と訳は暫定的なものであり、便宜上の行区分をほどこしている。漢語がいろいろな形で入っており、中には接続詞的な語なども入っているのがわかる。一部満洲語起源と思われる単語なども見られる。

なお、王士媛、馬名超、黄任遠編（1986:159-164）に同趣の話（ただし漢語のみ）が「長虫兄妹」としてある。

あらすじ：おじいさんとおばあさんが住んでいた。子供がなかったが、あるときおばあさんに子供が生まれた。なんとそれは2匹のオスとメスの蛇だった。おじいさんはそれを嫌って、すぐに捨てたが、おばあさんが拾ってきて、自分の乳を飲ませて育てた。その蛇は大きくなって出て行った。おばあさんがあとをつけて行ってみると、お土産を持たせて帰らせた。そのお土産の箱を開けると、宝物がいっぱい出てきた。それを見たおじいさんが自分も行ってみると、やはり箱を持たされて帰された。その箱を途中で開けると言われたが、つい開けてみると、蛇が出てきて、おじいさんを食べてしまった。

- 1 mafa mamari baldixatia. xitede ancaa. amile xitektextatia. zuru zabzan uzixenie.
爺さんと婆さんが暮していた。子供もいない。あとで子供が生まれた。2匹の蛇が生まれた。
- 2 zabzan uzixenie tei mafan ziu¹⁾ ei gelesini zabzama nodanxani.
蛇が生まれて、その爺さんはすぐこれを恐れて、蛇を捨てた。
- 3 nodanxani mamani bargirgile uletxenie. nedele emini emudan memeleania.
捨てたのを婆さんが拾い戻して育てた。手元に置いて1日1度乳を吸わせた。
- 4 memelexe ulewe axtaxania. axtako enere.
乳をやって育てあげた。(蛇は) 終わって出て行った。
- 5 ei mamam ziu ei xoktowoni uzi amani ine(?). enuxenie.
この婆さんはすぐそのあとをつけて行った。(蛇は) 帰って行った。
- 6 em zoo. beti sagdi zoo, guzkul zoo. (ta jiu shi …)²⁾ tii asaxiten ziu xezeinia,
一軒の家、大変大きな家、きれいな家。その娘(の蛇)が言うには、
- 7 “bailange³⁾ eni emexee. ei enie emexenduni. ooxik urkeleni enkonoya.
「恩義ある母が来ましたよ、この母が来たときにどの扉から入らせましょう？」
- 8 meun urkeleni enkonoya si⁴⁾ aisin urkeleni enkonoya.”
銀の扉から入らせましょうか、それとも金の扉から入らせましょうか？」
- 9 neuni xezeinia, “bailange eni emexenie, aisin urkeleni enkona.
弟(の蛇)が言うには、「恩義ある母が来たのです、金の扉から入らせなさい。
- 10 ai buda uluwe.” “eniduni im zakewe xebkonoya.” “eniduni ai guiz⁵⁾ xebkonoya.”
いい食べ物をあげなさい。」「帰るときにどんな物を持って行かせましょうか？」「帰るときに

いい箱を持たせましょう。』

- 11 eni eniduni ai guiz meixerileni ekonoya. enile debgelexenie. ni ai tegele ai bozo.
母は帰るときいい箱をかついで帰された。帰ってから聞いた。何といい着物やいい布。
- 12 tunele amini emexenie. amini emexenie ei asaxiteni xezeinia,
すると父 (= 爺さん) がやって来た。父が来て、この娘が言うには、
- 13 “ami emexenie ooxi urkeleni enkonoya. aisin urkenduni enkonoya
「父さんが来ましたよ、どの扉から入らせましょう？ 金の扉に入らせましょうか、
- 14 si meun urkenduni enkonoya.” “meun urkeleni enkoda. nio nyunkinia.
それとも銀の扉に入らせましょうか？」「銀の扉から入らせろ。その人が入ったら、
- 15 gitkul budawe zebkuna zusinuxen budawe zebkuna.”
冷えたご飯を食べさせろ、すっぱいご飯を食べさせろ。」
- 16 “zebke zebkunele eniduni ooxi guiz xineled enikonoya.
「食べ物を食べさせて帰るときに、どんな箱を背負わせて帰らせましょうか？」
- 17 “exe guiz xineled enikonoya”. eniduni amitkini “ezi ei guiz ed debgelere.
「悪い箱を背負って帰らせろ。」帰るときに父に「絶対この箱をあけないように、
- 18 adala ed debgelere”. adala dabgelexeni. ei guiz dulani zamun zabzan meki.
途中で決してあけないで。」途中であけた。この箱の中からたくさんのヘビ、ヘビ。
- 19 tei mafawe cak zebre odirkien. ei mafani axtaxanie.
その爺さんをきれいに食べてしまった。この爺さんは消えてなくなった。
- 20 mamani icanxani ei mafeye emxeni onnaxani emergesi daxanie. emergini enuxanie.
婆さんが見に行った、このじいさんは行ったきりどうしたのか、戻らないのか、戻って来るのか。
- 21 mafani cak zifxeni giamsenil tadu biren. ener mederxenie.
爺さんはきれいに食べられて骨だけがそこにある。行ってみてわかった。
- 22 ei amiye enixe guiz kinelezenixe.
この爺さんは戻って来る場所だったのだ、箱を背負って。

注

- 1) 就 *jiu*
- 2) 她就是 *ta jiu shi* : 語りの途中で漢語に切り替わりそうになった。
- 3) 満洲語 *bailingga* 「恩情ある (人), 恩人」
- 4) (还) 是 *haishi*
- 5) 柜子 *guizi*

5 主要研究文献

以下に中国での言語分類にしたがって、主要な研究文献を単行本の形のものを中心に紹介する。あわせて、総論・比較研究などにかかわるものと、本稿での引用論文等を掲げる。全体として、鄂温克語（実際にはその中のソロン語）の文献がやや多い程度で、あとの言語については質量ともに十分ではない。公式に文字をもつ満語・シベ語については、文語資料が豊富である分、かえって口語の正確な記述が少ないといううらみがある。

満語を除く各言語に対して『簡志』という名のシリーズが出ている。これは80年代後半に、中国のほとんどの少数民族に対して、各言語100～200ページほどの小冊子の形で出された簡略な文法ハンドブックである。簡単な音論と文法、そして巻末に意味別の語彙が付く、という体裁で統一されている。ツングース諸語の内、満語に関しては、おそらく文語の研究の伝統が長い割に、口語の話し手が極端に少ないという特殊事情のために、このシリーズに含まれていない。各言語について見通しを得るには便利だが、記述が簡単に過ぎるのはやむをえない。

最後に定期刊行誌としてあげた『満語研究』は、ハルビン市にある黒龍江省満語研究所から年2回出されている、満洲語およびツングース語研究の専門誌である。同研究所は中国のツングース語研究のセンターとしての役割を担っているが、人手不足などの理由で思うような調査・研究や資料の分析・刊行もなかなか難しいというような話を聞いている。またツングース語の中でも、満洲語は中国内の研究者も多いし、まだしも注目されている方で（もちろん大半は文献研究だが）、他のツングース語ということになると、国内研究者も少なく、研究もまだまだこれからというのが現状である。その一方で話者の減少は急速に進んでおり、日本をはじめとする外国人研究者の協力と貢献が期待されている。

鄂温克語

[ソロン語]

朝克 1995『鄂温克語研究』民族出版社, 251pp.

朝克・敖嫩・耐登・莫日根布和編 1988『鄂温克民間故事』内蒙古文化出版社, 528pp. (蒙文版)

賀興格・其達拉図・阿拉塔 1983『鄂温克語蒙漢対照詞彙』民族出版社, 310pp.

胡增益・朝克 1986『鄂温克語簡志』民族出版社, 191pp.

莫日根布和・巴圖蘇熱編 1983『鄂温克民歌』内蒙古文化出版社, 328pp. (蒙文版)

杜 道尔基編 1998『鄂漢詞典』内蒙古文化出版社, 795pp.

涂吉昌・涂芊玫 1999『鄂温克語漢語対照詞彙』黒龍江省鄂温克族研究会・黒龍江省民族研究

所, 269pp.

朝克 1991『エウンキ語基礎語彙集』(言語文化接触に関する研究3) 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 47+381pp.

津曲敏郎編 1993『朝克著「エウンキ語基礎語彙集」索引』(ツングース言語文化論集3) 小樽商科大学言語センター, 87pp.

朝克・津曲敏郎・風間伸次郎編 1991『ソロン語基本例文集』北海道大学文学部, 88pp. (ソロン語文献リストを含む)

Poppe, N. N. 1931 *Materialy po solonskomu jazyku*. Leningrad, 142pp.

[エウエンキー語方言]

朝克採録・著, 津曲敏郎編 1995『鄂温克語三方言対照基礎語彙集』(ツングース言語文化論集6) 小樽商科大学言語センター, 159pp.

津曲敏郎 1997「エウエンキー語オルグヤ方言についての覚え書き」『人文研究』93: 175-185, 小樽商科大学。

Tsumagari, Toshiro 1991 “An Ewenki index to the basic vocabulary of Khamnigan and Oluguya Ewenki.” 黒田信一郎・津曲敏郎共編『ツングース言語文化論集1』9-21, 北海道大学文学部。

——— 1992 “A basic vocabulary of Khamnigan and Oluguya Ewenki in Northern Inner Mongolia.”『北方文化研究』21: 83-103, 北海道大学文学部附属北方文化研究施設。

Janhunen, Juha 1991 *Material on Manchurian Khamnigan Ewenki* (Castrenianumin Toimitteita 40). Helsinki, 120pp.

鄂倫春語

韓有峰・孟淑賢 1993『鄂倫春語漢語対照読本』中央民族学院出版社, 385pp.

胡增益 1986『鄂倫春語簡志』民族出版社, 209pp.

孟淑珍編 1993『鄂倫春民間文学』黒龍江省民族研究所, 627pp.

薩希榮 1981『簡明漢語鄂倫春語対照読本』民族出版社, 71pp.

Zhang Yanchang, Li Bing, and Zhang Xi 1989 *The Oroqen language*. Jilin Univ. Press, 184pp.

赫哲語

安俊 1986『赫哲語簡志』民族出版社, 105pp.

王士媛・馬名超・黃任遠編 1986『赫哲族民間故事選』上海文芸出版社, 284pp.

尤志賢 1989『赫哲族伊瑪堪選』黒龍江省民族研究所, 555pp.

尤志賢・傅万金 1987『簡明赫哲語漢語対照読本』黒龍江省民族研究所, 229pp.

Zhang Yanchang, Zhang Xi, and Dai Shuyan 1989 *The Hezhen language*. Jilin Univ. Press, 145pp.

錫伯語

李樹蘭・仲謙 1986『錫伯語簡志』民族出版社, 166pp.

李樹蘭・仲謙・王慶豊 1984『錫伯語口語研究』民族出版社, 313pp.

山本謙吾 1969『満洲語口語基礎語彙集』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 234pp.

Jin Ning, and G. Stary (eds.) 1993 *Sibe-English conversation*. Harrassowitz Verlag, 102pp.

現代満語

恩和巴圖 1995『満語口語研究』内蒙古大学出版社, 388pp.

季永海・趙志忠・白立元 1989『現代満語八百句』中央民族学院出版社, 333pp.

趙傑 1989『現代満語研究』民族出版社, 192pp.

総論・比較研究など

朝克 1997『満通古斯諸語——比較研究』民族出版社, 368pp.

胡增益 1988「満通古斯語族」『中国大百科全書：語言・文字』, pp.274-277, 中国大百科全書出版社。

朝克採録・著, 津曲敏郎補訂・編 1997『中国ツングース諸語対照基礎語彙集』(ツングース言語文化論集11) 小樽商科大学言語センター, 171pp.

池上二良 1989「ツングース諸語」亀井孝・河野六郎・千野栄一編『言語学大辞典』第2巻, pp. 1058-1083, 東京：三省堂。

風間伸次郎 1994『ナーナイ語の「一致」について』(北大言語学研究報告5) 北海道大学文学部言語学研究室, 96pp.

———1996「ヘジェン語の系統的位罫について」『言語研究』109: 117-139。

———1999「ツングース諸語における指定格について」『語学研究所論集』4: 51-79, 東京外国語大学語学研究所。

田村建一 1992「ツングース語の属格表現」『言語研究』101: 169-170。

津曲敏郎 1992「所有構造と譲渡可能性——ツングース語と近隣の言語」宮岡伯人編『北の言語——類型と歴史』pp. 261-278, 東京：三省堂。

———1993「ヘジェン語の形態的特徴と満州語の影響」岡田宏明編『環極北文化の比較研究』pp. 81-92, 北海道大学文学部。

———1996「中国・ロシアのツングース諸語」『言語研究』110: 177-191。

Tsumagari, Toshiro 1997 “Linguistic diversity and national borders of Tungusic.” In H. Shoji, and J. Janhunen (eds.) *Northern minority languages: Problems of survival* (Senri Ethnological Studies 44), 175-186, Osaka: National Museum of Ethnology.

Hu Zengyi, et al. 1988 “Manchu-Tungus languages.” In S. A. Wurm et al. (eds.) *Language atlas of China*. C-5, Hong kong: Longman.

定期刊行誌

『満語研究』黒龍江省満語研究所 1985～双季刊 (2003年4月現在総35期まで刊行)。